



ほめて育てる

興味深い実験を見つけました。アメリカの心理学者キャロル・ドゥエック教授が、ニューヨーク市内の学校で行った実験です。5年生の児童に対して、次のような実験を行いました。児童を二つのグループに分け、それぞれに同じパズルを課題として与えます。テスト終了後、一方の児童達には「あなたは頭がいいわね。」と子ども達の賢さを褒めます。もう一方の児童達には「一生懸命やったのね。」とその努力を褒めました。

別の課題を準備して、「さっきのよりも難しいパズルと簡単なパズル、どちらに挑戦したい？」と選ばせたそうです。

その結果、努力を認められたグループの9割は難しい課題を選び、賢さを褒められたグループのほとんどの子どもは簡単な課題を選んだそうです。

賢さを褒められたグループは、「賢い」という評価を失うことを恐れて間違えるリスクを避けたのだと教授は説明しています。

この実験から、失敗を恐れずに挑戦する勇気を子ども達に育てるためには、どのように褒めていくべきなのかがわかります。

「知的好奇心」(中公新書 波多野誼余夫 著)にも興味深い記述があります。

褒め方として、「100点を取ったら〇〇を買ってあげる。」という褒め方は、慎むべきだと書かれています。初めは安い物でも喜ぶが、段々と高価になっていく。買い与えられなくなって褒め美の物がなくなると頑張ることをやめてしまう。物やお金で頑張らせるのは危険であり、やめるべきだと主張されています。

効果的な褒め方として、

1, 努力や過程を褒める。

上記の通りです。

2, 間接的に伝わるように褒める。

ウインザー効果と言います。第三者を通して褒めると効果的です。

3, 具体的に褒める。

「すごい」などの言葉でなく、「〇〇の話し方が順序だっていて、わかりやすかった。」などと具体的な良さを指摘する。

4, 相手の自己肯定感に合わせて誉める。

自己肯定感の低い子どもには、「あなたのおかげでものすごくやりやすくなった。」など、周りへの貢献を強調する。

余談ですが、教室で褒めるときにも注意しなければならない事がありました。みんなの前で褒めると嫌がる女子が一定数います。机間巡視時にさりげなく褒めることが必要でした。ただ単に褒めればよいというものでもないのです。

校長 篠崎 勇